The National Association of College Teachers for Japanese Language and Literature Education

「手袋を買ひに」研究・実践史

——〈「天使」と「悪魔」の矛盾はらむ母親像〉（西郷竹彦論文）をめぐって——

北　吉郎

一　はじめに

今から約二十年前、一九七六年七月、西郷竹彦は『日本児童文学別冊』の特集号である『新美南吉童話の世界』（ほるぷ社）において、『「てぶくろを買いに」論—矛盾はらむ母親像—』なる論文を発表した。（以下、西郷論文というときはこの論文のことを指す。）

この論文については、国語教育界では最も新しい特集号である『実践国語研究別冊』の『新美南吉「手ぶくろを買いに」の教材研究と全授業記録』（一九八八年六月　明治図書）という本の中で、石黒由香里が「『手ぶくろを買いに』研究・実践文献解題」を行っているが、そこで石黒は（西郷論文のことを）次のように解説している。

子ぎつねを一人で町まで行かせる母ぎつねについて、作者の生い立ちから「南吉は一方の手で『天使』的な母親像をまさぐり求めながら、他方の手では『悪魔』的な母親にふれないわけにはいかなかった——その矛盾が、この童話の母親像のなかに矛盾と分裂をもたらしている」とする。以後の「手ぶくろを買いに」の読みを方向づけたものとして、最も影響力の強い論文である。（傍線引用者）

これは、五十編の文献を対象に解題した中で、最大の評価（位置づけ）になっている。

また、石黒は同じ特集本の中で「『手ぶくろを買いに』研究・実践小史」なるものも執筆している。そこでは、「母ぎつねの行為」（すなわち「しかたがないので、坊やだけを一人で町まで行かせることになりました。」と叙述されてある行為に関する）項目を立て、西郷論文のことを最初に大きく取り上げて、次のように記述している。

文献⑥（本稿で取り上げている西郷論文のこと——北注）は、西郷竹彦氏の立場及び見方の鋭さの二点で、国語教育界に大きな影響を与えた。その結果、母ぎつねの行為をどのようにとらえるかについて、今日まで、様々な解釈が提出されてきている。そのいくつかを次に示す。（傍線引用者）

として、「様々な解釈」なるものを紹介している。

本研究は、新美南吉作「手袋を買ひに」がこれまでどのように研究され、実践されてきたか、とりわけ「しかたがないので、坊やだけを一人で町まで行かせることになりました。」と書かれてある母親像に関し——これを西郷は〈「天使」と「悪魔」の矛盾はらむ母親像〉として「手ぶくろを買いに」論を展開しているわけであるが、——そのことの波紋・影響の視点から研究・実践史を考察していこうとするものである。なお、この点については染原レイ子も次のように記述している。

評価の争点には、大別して次の二点があるようだ。一点は、母ぎつねが

NII-Electronic Library Service

The National Association of College Teachers for Japanese Language and Literature Education

なぜ子ぎつねをたった一人で町へやることにしたのかということであり、もう一点は、帽子屋の行為をどう受けとるかということである。（「小学三年『手ぶくろを買いに（新美南吉）』＝『作品別文学教育実践史事典』明治図書　一九八三・九　傍線引用者）

なお、本研究を進めていく上で「手袋を買ひに」に関する文献目録を、浜本純逸文献・石黒由香里文献・『校定新美南吉全集』の文献目録を基に、加除訂正や、いくつかの文献を追加して、より正確を期して作成した。（本稿末尾に添付する予定であったが、紙幅の関係から割愛）。本研究では、これらの文献（『新美南吉「手ぶくろを買いに」の教材研究と全授業記録』以前の文献、約百三十編）のすべてを収集し、目を通した。

二　西郷竹彦論文（『『てぶくろを買いに』論――矛盾はらむ母親像――』）の検討

西郷は、この論文で冒頭より次のように述べる。

「てぶくろを買いに」を教材として教室でとりあげたとき、よく問題になる場面がある。それは、母狐が子狐に手袋を買い与えようと思い夜になって町へ出かけるところである。

と問題を喚起し、ここで「手袋を買ひに」の作品の当該場面を引用し、続けて次のように記述している。

読者である子どもたちにとって、不可解なのは、人間が〈ほんとうにおそろしいもの〉であり、〈どうしても足がすすまない〉のなら〈しかたがない〉から、〈ぼうやだけをひとりで町までいかせる〉のでなく、たかが手袋ぐらい、断念すればいいのではないか。自分自身、〈足はすくんで〉一歩もすすめないほどの危険な場所になぜ、かわいい子狐を〈ひとりで町までいかせることに〉したのか。〈しかたがないので〉というが、なぜ〈しかたがない〉のか、というわけである。

何気なく読みとばしている読者には、それほど問題にもならず先へすすんでしまうところでもあるが、注意ぶかい読者なら、まずこのところでつまずいてしまうのではないか。

と、この場面が教室で「よく問題にな」り、「読者である子どもたちにとって、不可解」「このところでつまずいてしまう」と述べる。しかし、子どもの読みに関してこのような問題を孕んでいるかのような断定的な書き方は、数多くの実践記録を読むかぎり首肯しかねる。（少なくとも、「つまずいてしまう」ようなことはなさそうである）。つまり、（作品構造がそうなっているために）当然のことながら子どもたちの中には、母狐が子狐を一人で行かせたことに対して疑問や批判を投げかけることはある。だが、そのことは指導者の側も先刻承知のことであり、再び作品に戻ってよく読めば（読み深めれば）、（作品もまたそうなっているので）ほとんどの子どもがこの疑問に対しては解消していく。従って、こうしたやや誇張を含む断定的な書きぶりは、言うなれば竜が天に登る勢いであった国語（文芸）教育研究者西郷の文章であるだけに、注目度は大きく、それだけに問題を残す。実際、先に見たように、石黒由香里が「以後の『手ぶくろを買いに』の読みを方向づけたものとして、最も影響力の強い論文である」というような史的位置づけを行っているほどである。

しかしながら、事実はそうではなかった。西郷論文において先程の「子どもの読み」うんぬんはともかく、それ以上にはるかに重要な問題は、西郷のこの部分――すなわち〈子狐を町へ一人で行かせる〉場面に関する部分――の読み（作品解釈）が二十年の歳月の中で見ていくとき、必ずしも深い読みではなかったことである。それ

NII-Electronic Library Service

The National Association of College Teachers for Japanese Language and Literature Education

は、後に考察するように、国語教育を進めていく上で、さらに深い読み（解釈）が実践家の中から生まれてきていることを知るからである。実践家は本教材と格闘するなかで、この場面が何ら障害のない箇所であることを作品を読み深めることで克服してきている。（つまり、この場面ついては子どもの中には疑問を抱く児童も出てくることはあるが、しかしそれは表層的な読みであって、むしろそのことが教材をさらに読み深めることにつながる、言うなれば作品前半部の読みの授業における〝やま〟場（児童の思考が活性化する場）を形成していることを知るのである。――決して、この部分が作品の欠陥であったり、そのために避けて通ったほうがよい箇所などではないことを知るのである。――）

そもそも、西郷がこの論文を執筆する上で顧慮したであろう南吉研究（というよりも、正確には評論）として、当時の第一人者であった佐藤通雅の南吉論がある。西郷は自身の「手袋を買ひに」論を展開する上で、佐藤の論及箇所を引用している。すなわち、

> 人間が恐ろしくて足が進まなくなったというのに、子ぎつねを町へやったという母親が私にはいかにも不可解である。
>
> 「かあさんぎつねは、ぼうやの帰ってくるのを、いまかいまかと、ふるえながらまっていましたので、ぼうやがくると、あたたかいむねにだきしめてなきたいほどよろこびました。」というほどだから、たいへん冒険しているわけだ。それほどのことをあえて子ぎつねにやらせるというのはどうしてなのか。童話に登場する母親としては（悪役としての母親ならいざしらず）失格ではないのか。このぬぐいがたい不可解さがあるため、「てぶくろを買いに」を無条件には認めることができない。（『新美南吉童話論――自己放棄者の到達――一九八〇・九　傍線引用者）

これは、作家論・作品論として南吉作品を見ていった場合の、佐藤の「手袋を買ひに」評価である。ここで、「童話に登場する母親としては」云々とあるが、この点こそがまさに南吉作品が多くの〈無害〉というか、一般的な童話に似ていない部分――「文学性」（特質）――である訳であるが、そうして見ていくと主人公が死んでしまうような「ごん狐」は全くもって「童話」としては失格であろうかと思われる。

ここでは、作品評価を含む南吉論としての私自身の「手袋を買ひに」論は他の機会に譲るとして、ここに佐藤が述べる「不可解」（二度出てきている）の語が、西郷論文の中では「読者である子どもたちにとって、不可解」という形で出てきている点に注意を喚起しておくにとどめる。

さて、佐藤はこうした「不可解」さを「ストーリー」の強引さにあるとみて、その理由を「おいそれとは理解し合うことのできない孤絶した」「二者」（ここでは、母狐と人間――引用者注）を対立させるという「構想が先走ってしまったことからきたものと考えられる」と別の箇所で述べている。

これに対して、異なった角度から「不可解さに照明」を当てようとしたのが西郷論文である。それは、作者南吉の生い立ち、人となりの関係における南吉の描く母親像の解明という方法でなされた。ここで、西郷は南吉の自伝的私小説系列に属する「帰郷」という作品を取り上げ、そこに登場する「天使から悪魔に変じてしまう」矛盾を孕んだ継母像を紹介している。そうして、こうした継母に対する南吉の母親観が「手袋を買ひに」では、子狐を一人で町へやる場面に反映し、「この童話の母親像のなかに矛盾と分裂をもたらして

NII-Electronic Library Service

The National Association of College Teachers for Japanese Language and Literature Education

いる」とする。この作家論・作品論は、私自身の考えを述べればかなり正しいように思われる。また佐藤の「手袋を買ひに」論よりも深いところを突いているように考える。この点で、西郷論文を支持する。しかしながら、こうした南吉作品の特質をもって、佐藤の「不可解」、児童文学作家である古田足日の「作品の欠点」(1) というような作品評価を引き合いに出して、というよりもそれらを踏まえる形（配慮した形？）で、国語教育との関係において次のような自らの評価を下したことは、まことに惜しまれる拙速ではなかったと思われる。

私は南吉を高く評価している者の一人であり、この「てぶくろを買いに」も好きな作品である。にもかかわらず、いや、だからこそといったらいいか、私は、南吉の矛盾をはらむ母親像がここに裂け目を露呈していることを惜しむのだ。

あえて付言すれば、それでも私は、この作品を愛しているし、また、子どもたちに読ませることを辞さない。それは、たとえキズがあっても玉は以前玉だからである。（『てぶくろを買いに』論――矛盾はらむ母親像――」傍線引用者）

戦後日本の文学教育において、実質的かつ有力な理論的指導者の一人である西郷が、小学校文学教材としてよく取り上げられる「手袋を買ひに」について、「裂け目を露呈」、「キズ」と述べたことの衝撃は少なくないものがあったと思われる。たとえ、〈玉にキズ〉とは述べながらも、「キズ」の部分が一人歩きし、その「キズ」をどの程度のものとして斟酌すればいいのか、教科書採用や自主教材として本格的に実践しようと取り上げるときの躊躇、また子どもたちに読ませる上でその部分をどのように扱えばよいのか、といったような一定の慎重な態度を研究者や実践家に与えたことは想像に難くない。その意味で「影響」を与えたであろうことは十分に推測できる。

しかしながら、大変重要なことであるが、この場面に作者側の意識としては（あるいは無意識のうちに(2)）継母像が投影されているとしても、そのことが果たして「キズ」になるのかどうか。それどころか、作品を読み深めていく国語教育の立場に立ったとき、それ（「キズ」というようなとらえ方）は西郷の拙速な読み（西郷と言えども、過ちは起こり得よう）であって、むしろこの場面は継母像が投影されている（であろう）がために、手応えのある文学教材として実践されている(3) としたら、どうなるであろうか。

三　先行の「手袋を買ひに」研究・実践史の検討

先行の研究・実践史の文献には次のものがある。

①濱田光代「『手ぶくろを買いに』の授業小史」（『国語の授業』55　一光社　一九八三・四）
②染原レイ子「小学三年『手ぶくろを買いに』（新美南吉）」（『作品別文学教育実践史事典』明治図書一九八三・九）
③深川明子「『手ぶくろを買いに』実践研究の現状――どこに問題があるのか――」（『手ぶくろを買いに』の全発問・全指示』明治図書一九八七・二）
④大内善一「国語科教材研究の手順・方法に関する実態的研究――『手ぶくろを買いに』教材研究史研究を通して――」（『秋田大学教育学部教育工学研究報告』一九八八・四）
⑤石黒由香里「『手ぶくろを買いに』研究・実践小史」（『実践国語研究』別冊　79　明治図書　一九八八・六）

紙幅のことがあり、詳細は述べられない。

①の濱田光代論文は、最初の「授業小史」。「私の目に触れた数少

NII-Electronic Library Service

The National Association of College Teachers for Japanese Language and Literature Education

ないものについて紹介する」とあり、六名の授業実践記録を取り上げ、問題点を摘出している。ただ、なぜその六名なのかは不明であり、論述の視点も記述されていない。

②の染原レイ子論文は、当時の文献によく目を通した研究になっている。先述したように、作品評価に二つの争点があることを指摘している。その一つが本研究で取り上げている問題。

染原は、子狐を一人で町まで行かせた母狐像を否定的にとらえている佐藤通雅および西郷竹彦と、そうではなく「親子の自然な愛情」だととらえる高橋和夫、それどころか「未来を孕む子狐を、畏怖に充ちた、しかし、美しい人間の住む街に行かせるのは、かえって母親の愛情」だと、積極的・肯定的に受けとめている石川一成を対等に取り上げ、紹介している。それは恐らく、染原自身にとって次のような見解を有するためであろうと推測される。

この作品のもつ、ファンタスティックなメルヘン的世界の描写の美しさと、子ぎつねの無邪気で純粋なかわいらしさは否定できない。

この童話の世界そのものの美しさに、様々な問題が影を投げかけることによって、それぞれの年齢や考え方に応じた幅広い読みを可能にしているのではないだろうか。南吉自身の終生の内面抗争にとどまらず、読む者全ての心に共通する内面抗争と言えるだろう。それ故に、文学として、長く読み親しまれてきたのだし、子どもは子どもなりに、青年は青年なりに、大人は大人なりに、これからも先もやはり、読みつづけていく作品と言えるだろう。（傍線引用者）

この見解は、西郷の〈玉にキズ〉論とは明確に対立する見解ではないかと考える。「キズ」どころか、「様々な問題が影を投げかけることによって、それぞれの年齢や考え方に応じた幅広い読みを可能にしている」と述べている。

③の深川明子論文では、基本的に西郷論文をふまえた上で「作品の欠陥を露呈させないで、授業するにはどういう方法があるだろうか」と記し、三名の実践家を取り上げて考察。

④の大内善一論文では、佐藤通雅・西郷竹彦・石川一成・大熊徹の解釈をそれぞれ考察し、その中で母狐の姿を「冷酷でも悪魔でもない極めて人間的」だとする大熊の解釈を支持している。

⑤の石黒論文については、先に見たとおりである。

こうして見ていくと、西郷論文に同調するかしないかは別にして、研究実践史を述べる中で「以後の『手ぶくろを買いに』の読み方を方向づけた」というような歴史的位置づけは石黒の論考において見出される。ところで、こうした特集号の役割といったことを考えると、「手袋を買ひに」をこれから実践また研究しようとする者は、誰もがまず最初に西郷論文から読み始めるであろう。そうして、その論文の影響の多大であったことを頭の中に入れて、その上で自分の考えをはっきりさせていくことになろうかと思われる。それほど重要な位置づけがここではなされている訳であるが、問題はそのことが正しいならばよいのであるが、そうではない（むしろ誤っている）ように思われるので本研究を述べている次第である。

また、このことは関連して「今日まで、様々な解釈が提出されてきている」と記述されるが、その文脈では西郷論文が大きな存在としてあって、その論文内容の影響下に「様々な解釈」が併存するかのように受け取れる。果たして、そうなのだろうか。ほんとうにそれは、「様々な解釈」（傍点引用者）なのだろうか。この点も、重要な考察点になってくるかと思われる。

NII-Electronic Library Service

The National Association of College Teachers for Japanese Language and Literature Education

以上のことを考察する上で、便宜上、西郷論文以前と以後とに分けて検討する。

四　西郷竹彦論文以前の「手袋を買ひに」研究・実践

この問題を考える上で、直接的に関係する、あるいは参考にしたい文献、として次がある。

△①　巽聖歌「新美南吉君について」（『牛をつないだ椿の木』大和書房　1943・9）

△②　三浦東吾「『手ぶくろを買いに』――教育出版三年下――」（『国語の教育』12号　国土社　1969・4）

○③　梶田幸恵「子どもの多様な発言を生かす――『てぶくろをかいに』（新美南吉）をあつかって――」（『多様性を生かす文学の授業』国土社　1971・12）

○④　秋本政保「まず教師がかわる――かくれている問いの発見――」（『国語の教育』46　国土社　1972・2）

○⑤　佐藤義巳「教材分析と授業（小・四）」（『文芸教育』9号　明治図書　1973・5）

△⑥　青木幹勇「人間を読む」『授業技術集成3　考えながら読む』（明治図書　1976・5）

これらの中で、この問題に直接的に関係するのは○印（③④⑤）である。△印（①②⑥）は、この問題を考える上で参考にしてみたいと思い取り上げてみた。

まず、後者（△印）のほうから順に見てみる。

①は、最初の童話集。師的存在であった巽聖歌がどのように見ていたか。巽はこの作品について、「狐の親子をかりて、人間は決して憎むべきものではない、むしろ愛すべきものだということを語ろうとしたもの」と述べる。すなわち、作品主題を〈人間は信じるに値するかどうか〉にあるとしており、子狐に対する母狐の愛情の点については問題視されていない。

②は、初めて教科書掲載の「手ぶくろを買いに」を原作「手袋を買ひに」と比較研究した上で教材研究を行った非常に力のこもった論考。ここでも、〈人間信頼の回復〉に主題を見ており、母狐の子狐に対する愛情への疑念といったことは問題になっていない。

⑥は、すぐれた作品論になっているので取り上げてみたが、ここでも母狐と子狐の人間観の相違は出てくるが、母狐の愛情を疑問視するような点は見受けられない。

この問題に直接関係のある文献として、

③は、氷上正の指導下に進められた読みごたえのあるすぐれた授業実践記録。この場面に関しては、深い読みに支えられた実践的克服がうかがわれる。すなわち、子どもたちはしもやけがひどくなった場合を想像し、また子狐はそれほどまでに町へ行きたがっているという読みが提出されている。

④は、これぞまさしく本作品の実践研究史における最大の功労者の一人。すなわち、「しかたがないので、坊やだけを一人で町まで行かせることになりました。」に着目した読みの発見。つまり、「坊やだけを一人で町まで行かせることにしました」ではない、「行かせることになりました」と表現されていることとの違い。（いずれも、傍点引用者）

⑤は、文芸研方式による詳細な教材分析と克明な授業実践記録。「夏の全国集会（高知県中村市）の分科会でこの作品分析と授業を提案し、さいわい、参会された先生方に、終日検討してもらうことができた。その際、問題になったことを反省し、さらに、教案を練

NII-Electronic Library Service

The National Association of College Teachers for Japanese Language and Literature Education

り直して再度授業を試み、このようにまとめた」とあるだけに、非常に読みごたえのある実践報告。

「意外」なことにというか、母狐の愛情を問題にするようなところは教材研究段階では出てきていない。ただ、熱のこもった克明な実践記録であるので、〈子ぎつねを一人で町へやる〉場面では、母狐の愛情に疑問を投げかける児童の発言も出てきているが、授業者は次のように述べている。

生まれて間もない子ぎつねを町までひとりで行かせる母ぎつねに対して、「親としては無責任だ。」と初めの感想で述べていた子どもがいたが、〈たしかめよみ〉を経て、「小見出し」つけの〈まとめよみ〉の段階になると、このように、心のやさしい母ぎつねとしてとらえているのはおもしろい。（傍線引用者）

このように見てくると、作品論や教材研究ではこの問題についての疑問は提出されていない。実践場面でこの問題に対して正面から取り扱った場合には、一歩踏み込んだ教材解釈に基づく読みの学習が行われている。これは、すぐれた読みの授業の場合、一つひとつのことばの意味を子どもたちと一緒に吟味しながら読み進めていかなければならない厳しさから、机上にとどまる作品研究以上に深い読み込みが要求されるためではないか、と考えられる。いずれにしても、〈子狐を一人で町へやる〉場面に関しては、この時点で既に西郷論文以上の深い読み込みが実践家によって提出されていたことを知るのである(4)。

五　西郷竹彦論文以降の「手袋を買ひに」研究・実践

西郷論文以降については、次の文献を基に検討してみる。○印はこの問題に直接関係する実践や教材研究、△印はこの問題に直接触れている作品論あるいは直接には関係ないが主題に触れており、この問題を考えていく上で参考にしたい実践や教材研究、□印は文芸研の実践である。

○⑦　岡本壽「〈教材〉手ぶくろを買いに（G社　三上）」（『国語教室の手帖』甲南出版社　1973・3）

○⑧　朝倉伸子「〈教材研究〉『手ぶくろを買いに』（新美南吉）」（『国語の授業』NO・32　一光社　1979・6）

○⑨　岡田文雄「手ぶくろを買いに」（光村）（『国語科わかる発問の授業展開3年』　明治図書　1981・3）

□⑩　末広清利「小学校中学年の文芸の授業――『小さな犬の小さな青い服』『手ぶくろを買いに』を中心に――」（『文芸教育』32号　1981・5）

△⑪　武西良和「視写を通して確かな読みへ――『手ぶくろを買いに』他」（『実践国語研究』NO・31　1982・5）

○⑫　上岡圭子「どんな発問が、内容にせまらせることができるのか」（『授業における教師の発言』明治図書　1982・9）

○⑬　福島十八「教材研究と一時間の授業の全文記録――『子どものきつね』から『きつねの子ども』『子ぎつね』へ――」（『国語の授業』NO・55　一光社　1983・4・15）

○⑭　山口昭男「子どもたちと一人勉強に取り組んで」（『一人ひとりを生かす個人学習』明治図書　1983・9）

△⑮　大熊徹「南吉童話『手袋を買ひに』研究」（『文学と教育の会』1983・9）

△⑯　三好修一郎「新美南吉『てぶくろを買いに』小論――その主題をめぐって――」『仁愛女子短期大学国文学会機関誌』第1号　1984・3）

△⑰　井上敏夫「主人公の行動を追体験する――『手ぶくろを買いに』（三年）」（『国語教材の読み方　読ませ方』光村図書　1984・4・12）

□⑱　西郷竹彦監修・文芸研編『文芸研教材研究ハンドブック5　新美

NII-Electronic Library Service

The National Association of College Teachers for Japanese Language and Literature Education

南吉＝手ぶくろを買いに』（明治図書　1985・2）
□⑲　長尾扶沙枝「小学校三年　手ぶくろを買いに」（『文芸教育』46号　明治図書　1985・5）
○⑳　栗林正樹「『手ぶくろを買いに』の教材研究（『教育科学国語教育』NO・345　明治図書・1985・3）
△㉑　野口芳宏「三年『手ぶくろを買いに』（新美南吉作・光村三下）――微妙な読みとりのずれにこだわって――」（国語教室の活性化　小学校編』明治図書　1986・2）
△㉒　平泉靖子「手ぶくろを買いに」（光村・三年下）の授業研究（『読みを深める授業分析』明治図書　1987・4）
㉓　授業者　大参由美子「『手ぶくろを買いに』全授業の展開と研究」（『実践国語研究　別冊』明治図書　1988・6）
㉔　甲斐睦郎「『手ぶくろを買いに』の表現」（『実践国語研究　別冊』明治図書　1988・6）

この問題に直接関係する○印（⑦⑧⑨⑫⑬⑭⑳）から順に述べる。

⑦は、「母子ぎつねの行動心理の起伏をたどるには、まだ幼すぎる」「論議は、しばらく置くことのほうが却っていい」と述べ、その意味で西郷論文の「影響」を受けている（正確には西郷論文を「意識」している）。しかしながら、西郷論文に対して同調はしていない。つまり、「キズ」としての見方はとっていない。

⑧は、「しかたがないので」ということばと、「行かせることになりました」の「なりました」の表現に着目。

⑨は、「そんなにかわいい子ぎつねを、どうして町へ行かせたんでしょうか」という発問はあるが、「人間の手で手ぶくろを買うことだけが、『子ぎつねがつかまらずにもどってこられる方法』であるという方向での話し合いになっている。つまり、母親の非情さという考え方はとっていない。

⑫は、友だちのきつねがあひるを盗もうとしたことに対して「およしなさい」と制したときの母ぎつねのことばに、「人間を敵対視していない気持ち、むしろ、人間の生活を見たい、ふれたいという憧れにも似た思い」を読み取り、「それでも人間の前へ、ぼうやだけを一人で行かせることになったのは、どうしても手ぶくろをはめさせてやりたいという切ないまでに子を思う母の愛であり、決して意識はしてないけど、人間に対する信じたいという思いがあったからにちがいない」（傍線引用者）という、本作品に強い愛着を抱き二度にわたって授業実践に挑んだ実践家ならではの、読みに読み抜いた斬新な解釈の提示。

⑬は、児言研の精細な作品研究と教材解釈の上になされた実践報告。「なりました」という文末表現に着目。

⑭は、「行かせることになりました」と表現されたのは、「母ぎつねの決断の前に、子ぎつねと母ぎつねの話し合いがあったのではないか。その二人の話し合いの結果、子ぎつねを一人で町まで行かせることになったのではないだろうか」という読み。

この解釈は、一九七二年の秋本論文（前出の④）をさらに一歩深めた解釈を行っており、ここに「坊やだけを一人で町まで行かせることになりました」をめぐる問題は、実践の場ではほぼ克服された形になっている。

⑳は、母ぎつねの行為について、これを肯定する解釈。（紙幅の関係上、詳述を略す）。

次は、△印（この問題に直接触れた作品論、あるいは直接には関係ないが主題に触れており、この問題を考えていく上で参考となる

NII-Electronic Library Service

The National Association of College Teachers for Japanese Language and Literature Education

実践や教材研究）について考察する。

⑪は、西郷論文とは逆に〈母親のやさしさ〉を考えさせようとした授業記録。

⑮は、母狐の問題を、「子狐をひたすら愛する愛情に満ちた母狐なるが故の人間的な悩み苦しみ」「冷酷でも悪魔でもない、極めて、人間的」としている。（西郷論文を意識した論考であるが、その内容は否定的）

⑯は、代表的な否定論者である佐藤通雅に対峙するすぐれた作品論。本作品の価値を「『思慮が足りない』（佐藤通雅――引用者注）と指摘されるほどに完璧性を欠いた母親であったが故に実現できた（「ダイナミックな母と子の関係を描き得た」――引用者注）」と、高らかに評価。

⑰は、「子どもたちは、子ぎつねと自分を同一化して読んでいくんですから、（中略――引用者注）無邪気な姿をいっしょになって追体験していく。そこのところがこの話のおもしろい点」。子どもの側に視点を置いた教材論の立場から積極的に評価。

㉑は、究極の内容価値を「きつねの親子のしあわせ」においている点、西郷の読みとは異なる。

㉒㉓は、全授業を記録した大変力の入った実践。ただし、この問題に関してはほとんど入り込んでいない。

㉔は、これまでの作品論、教材研究、授業実践報告をふまえたみごとな総括。すなわち、「母さんぎつねとしては、町へ行くことに恐れを抱いている訳ではないが、足が動かないのでしかたがない。それで、いろいろ話し合った結果、一人で町へ行かせる結論になった」「『ぼうやだけを一人で町まで行かせることになりました』から、無責任な、愛情に乏しい母親像を読み取る解釈もあるが、間違っている。この母さんはいろいろと思案し、子どもの安全を十分に計算した上で初めて町まで行かせることにした。」とある。

ここに初めて、「手ぶくろを買いに」という美しい作品が親子の狐の愛情物語として把握される解釈がはっきり宣言されることになる。

最後に、□印（文芸研の実践⑩⑱⑲）について考察する。

⑩は、「親子の人間認識」の対比に焦点を当てて進めており、子狐を一人で町へ行かせることについては、そのことを特に問題視していない。

⑱は、驚いたことに実践者はこのハンドブック（「手ぶくろを買いに」の特集）での教材分析において、「このように、きつねの母子の暖かいふれ合いの中に、典型的な美しい親子関係を見出すことができます。」と述べている。これは、西郷の「矛盾はらむ母親像」（〈天使と悪魔の母親像〉）とは異なった教材解釈と言えよう。それでも、同書中の「西郷先生に聞く――『手ぶくろを買いに』をどう扱うか――」では、西郷は「作品の破たん」「作品がはらんでいる矛盾」とし、また「この作品は、そういう傷、破たんがあっても、いやその傷は大きいかもしれない、だけども全体としてみるとすばらしい作品」と述べ、分かりにくい記述になっているが、「そんなところはとり上げないということも大切でしょう」という発言を行っている。

⑲は、この問題に関しては「母ぎつねの言動の矛盾は矛盾として、

NII-Electronic Library Service

The National Association of College Teachers for Japanese Language and Literature Education

それ以上解明することはせず、母ぎつねの最後のつぶやき『本当に人間は、いいものかしら』を大切にして授業を続けたい」と述べる。（⑱にみられる主宰者の発言内容に即した取扱いになっている。）

六　おわりに

以上のように、これまでの考察を通して、結局西郷論文に同調するような文献は、（文芸研の中の一部を除けば）ほとんど見当たらなかったことになる。「影響」ということばを「意識した」という意味では、西郷の存在は大きいだけに無視できないものがあったことと思われるが、しかし肝心の書かれてある内容の実質は西郷論文の「キズ」論に与するものではなく、ほとんどが否定的ではなかったかと思われる。要するに、「様々な解釈」（傍点引用者）ではない、〈否定的な解釈〉である。そうしてみると、石黒が述べる「以後の『手ぶくろを買いに』の読みを方向づけるものとして、最も影響力の強い論文である」（傍点引用者）とする歴史的位置づけは誤っている。この点に関するかぎり、実態は〈亡霊〉的であり、仮に「影響」ということで言えば、むしろ本教材を取り上げ、授業実践していく上で停滞させる（躊躇し、迷わせる）ことになりはしなかったかと思われる(5)。

〈注〉

(1) 古田足日「解説」（『おじいさんのランプ――新美南吉童話集』岩波書店　1965・11・25）古田はこの中で、「作品の欠点」と述べているだけで、論拠となるようなことは何ら記述しておらず、不明。

(2) 北自身の見解は「無意識のうちに投影されている」である。この点については、稿を改めて考察したい。

(3) 「ごん狐」の場合では、先行すること西郷論文の約十年ほど前からその教材性をめぐって議論が巻き起こり、さまざまな立場の第一級の研究者によるパネルディスカッションが催され、そうした議論の嵐をくぐり抜け、それでもなお多くの実践家と子どもたちの読みに支持される形で、今日の評価が確定してきたという経緯が存在する。そうした意味では、「手ぶくろを買いに」は同一テーブルでの議論の場こそなかったが、本研究で述べるように、実態的には西郷論文の大きな問題提起に対して、同調しない形での数多くの実践・研究が行われてきている。それは、小学三年生を対象とするすぐれた文学教材として代替できる作品を、他にはなかなか見出せないでいるためであると思われる。

(4) ここでいう「西郷論文以上の深い読み込み」というのは、言うまでもないことであるが、作家論としての「手袋を買ひに」論ではない。そこに、継母像が投影されているかどうかはともかく、当該場面が国語科教育として読み進めていく場合、その箇所の表現がどのような叙述になっているか、そうしてその表現からはどのように読めるか（あるいは、どのように読むのがその前後や、作品全体からみて適切であるか）ということを、実践家が提示しているということである。すなわち、〈キズ〉としての表現にはなっていない、とする指摘である。

(5) 西郷竹彦（文芸研）が、数多くの南吉作品等の児童文学作品を国語教材として掘り起こし、自主教材として取り上げることで普及させてきた事実は、戦後文学教材史を考えていく上で特筆に値する。そのことを大いに承認しつつも、この問題では作家・作品論を国語教育に拙速に持ち込んでいる（「キズ」というような速断）、この点は南吉作品に関する氏自身の功績の中で、いわば一つの〈キズ〉部分である、と北自身は考えている。（「南吉を高く評価」し、「この作品を愛し」、「子どもたちに読ませることを辞さない」とする西郷にとって、意に反したことになっている、と考える。）

（高知大学）

一九九五・一・二七　発送

NII-Electronic Library Service